

生涯学習機会への参加・非参加を分岐する 規定要因の実証的研究

—学習関心調査にみる生涯学習参加意欲に注目して—

原 清 治

抄 録

本稿は生涯学習機会が拡大してきている社会的状況を受けて、高齢者を対象として実施した学習関心調査を実証的に分析したものである。学習機会へのコミットメントの差によって作成した「参加意欲」合成変数による多変量解析を行った結果、参加・非参加を分岐する規定要因には、学歴や職業といった属性要因以外にも、地域への寄与や社会的役割の認識度といった心理的要因や、社会教育施設の利用や学習方法といった形態的要因においても同様に規定力を持つことが指摘された。

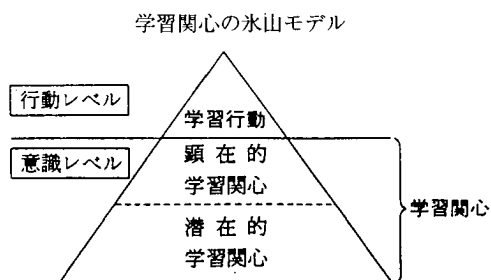
キーワード

地域生涯学習計画 学習ニーズ 学習機会参加意欲 学習関心調査 多変量解析

はじめに

NHKの放送文化調査研究所による「学習関心調査⁽¹⁾」の特徴は、人々の持つ学習要求を行動と意識の2つのレベルに分けて分析を試みた点である。これは一般に「学習関心の氷山モデル」と呼ばれる以下のような概念図式によって説明される。

つまり学習とは、すでに学習行動となっているものと、意識のレベルに止まっているものがあり、意識レベルすなわち学習関心は何らかのインパクトを受けることによって学習行動へと転化するのである。その形状を氷山に例えるならば、海面上に現れている部分が行動レベルの学習であり、海面下の部分が意識レベルの学習すなわち学習関心である。



また、同じ学習関心の中にも二層あり、ふだんから意識されていて、行動化の可能性が高いものを顕在的学習関心、外からの刺激や手がかりが与えられて初めて意識されるものを潜在的学習関心とよぶ⁽²⁾。この場合、すでに行動に移されている学習の実体や、少なくとも顕在的に自覚されている学習関心については測定が容易であるが、潜在的関心については、定点的観測調査等さまざまなアプローチを講じなければならない。

同様の指摘がピーターゼン (R. Petersen) によってもなされている。彼によれば、学習ニーズとは、人々が学習することを意識的にあるいは無意識的に求めていることであり、そうした学習ニーズには意識層の表面にあって自覚されているニーズと、意識層の深層に沈潜して普段は自覚されていないニーズとに大別される。そして、質問紙調査等によって把握できる学習ニーズはその内の自覚されているニーズが主であることを説くのである。したがって、これら先行研究を十分に考慮に入れた上で、学習関心調査は策定されなければならないのである。

こうした指摘に対する試みとして、本調査研究においては前述のNHKの学習関心調査や大阪大学社会教育論講座が実施した「吹田市における生涯学習調査」の結果を参考に、反復継続調査の手法を用いるとともに、「生涯学習参加意欲」と呼ぶ合成変数を作成することによって、生涯学習関心の実質に少しでも近い分析をすることを念頭に置いている。

1 調査概要と分析の枠組み

まず、今回実施したアンケート調査⁽³⁾の概要について簡単にふれておきたい。

本調査は、阪神大震災前の神戸市兵庫区と北区の2地区を対象地域として、平成6年9月から10月にかけて、両地区の老人クラブの協力を得て実施したものである。調査は自記式の質問紙を用いた配票・郵送法によって行い、有効回答数1,426を得た。また、サンプルの属性については注の表に示す通りである。

今回の調査に投入された変数は全部で43カテゴリーであり、1データ269カラムという量的にかなり大きなものであった。分析にあたっては、パソコンによる統計パッケージSPSSを用い、数量化Ⅱ類の分析のみ京都大学大型計算機センターの統計パッケージSPSSXを使用した。

本稿では、以下の3点を中心的な視点として考察する。

1. 生涯学習に対する取り組み方や考え方には、地域差が有効な変数となり得るか。また、地域によってどのような変数に、どの程度の差が生じるのかを具体的に明らかにする。
2. 生涯学習機会への参加意識について変数を合成し、学習に対する認識や参加意欲の強い人々は、他の変数とどのような関連にあるのかを考察する。また、認識や参加意識の弱い人々はどうかについても検討する。
3. 生涯学習機会への参加・非参加を分岐する規定要因として、一般的にどのような変数

が、相互にどの程度の規定力を持っているのかを多変量解析を用いて明らかにする、の3点である。

2 地域差による検討

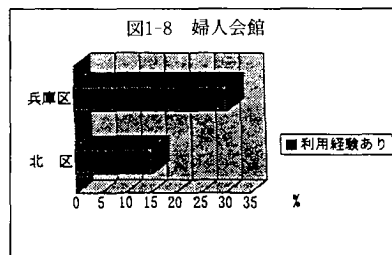
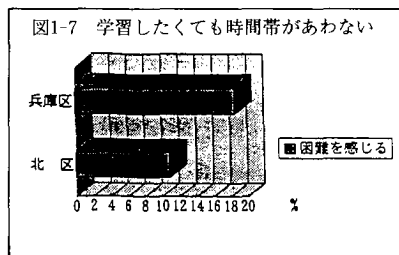
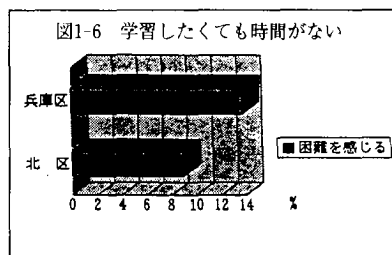
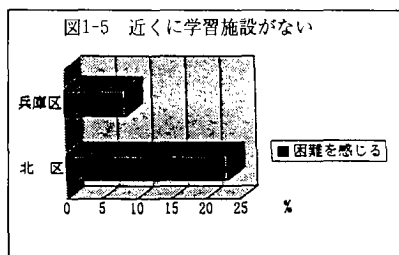
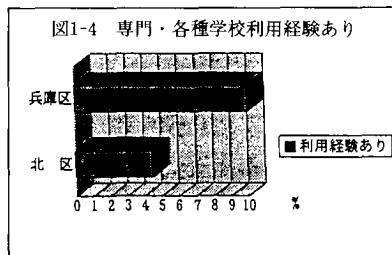
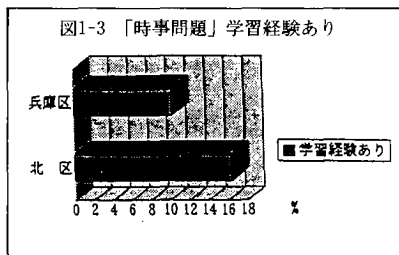
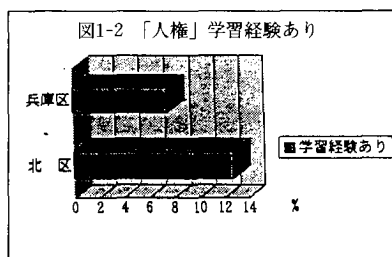
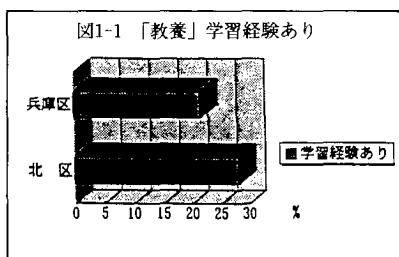
まず1つ目の分析視点である「地域差」について検討したものが、図1-1から図1-22までである。全部で22変数についてグラフ化してあるが、これらの変数は、アンケート調査に投入されたすべての変数と地域差との相関係数を取り、地域が異なることによって、その間に有意な差が生じる変数のみを図示したものである。神戸市の兵庫区と北区について、簡単に地域の特徴をまとめるならば、両地域はそれぞれに都市部の地域ではあるが、兵庫区は神戸の中心地に近く、その大部分が古くからの商業地域で占められている。それに対して北区は都心部から見た場合、六甲山の裏側に広がる地域であり、緑豊かな田園丘陵地帯で、近年住宅開発によって急速に都市化が進んでいる新興住宅地域といえることができる。したがって本調査でいう地域差とは、都市部における「商業地域」と「住宅地域」との差として分類されるものである。

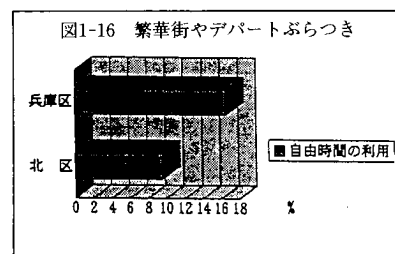
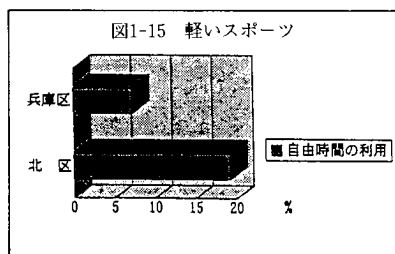
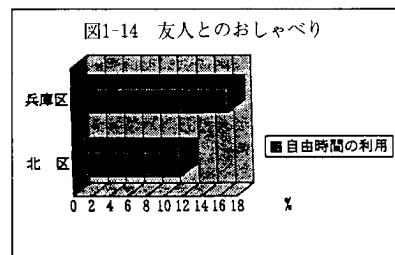
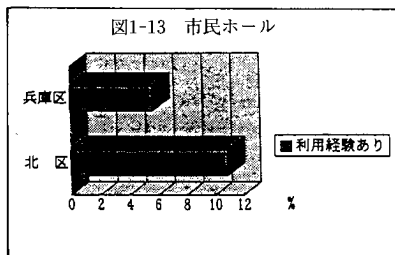
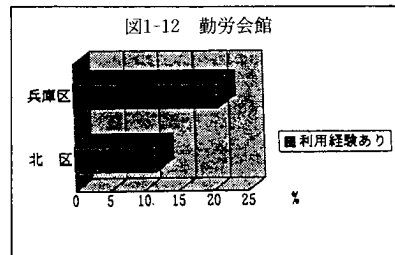
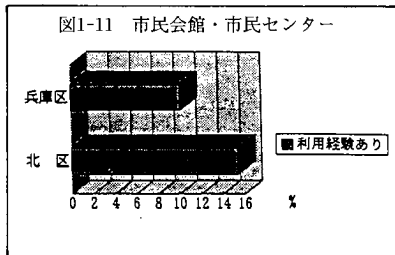
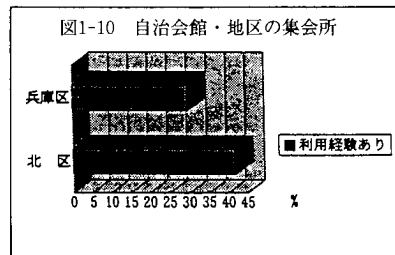
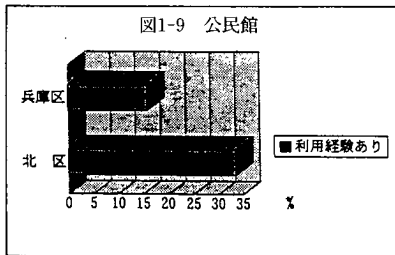
図1-1から図1-3までは、これまでの学習経験と地域との関連をみたものである。全部で15項目からなる学習内容の中から、有意な地域差のあったのが「教養」「人権」「時事問題」の3項目であり、いずれも北区の方が兵庫区を上回る結果となっている。北区はこれら3項目の他にも「趣味」や「老後」といった項目にも兵庫区に比べて高い数値を示している。これに対し、商業地域である兵庫区では、有意な差としては見られないものの「健康」や「資格」といった項目に北区よりも高い数値を示す結果となった。こうした結果を概観する限りでは、新興住宅地域である北区にアカデミックな分野の学習経験者が多く、商業地域である兵庫区には実質・実学的な分野での学習経験者が多いという地域の特徴を指摘できそうである。

さらに、このような結果を説明するのに有効だと思われる結果を示したのが図1-4から図1-7である。図1-4では、さまざまな学習方法の中から「専門学校や各種学校を利用した経験がある」と回答した割合が北区では5%弱であるのに対し、兵庫区では10%を上回り、有意な差となって表れている。専門学校や各種学校の特色の一つは教室が都心部にあることであり、兵庫区が北区に比べて都心に近く、その条件を満たしていることや、先の指摘のように、兵庫区の方が資格関連の学習経験者が多いことなどと無関係ではなさそうである。

また、図1-5から図1-7は「学習をしたいと思った時に、困ることがありますか」という問いに対する回答であり、有意な地域差が明らかとなったのが、北区における図1-5のような「近くに学習施設がない」ことへの困難さや、兵庫区における図1-6「学習したくても時間がない」や、図1-7「学習したくても時間帯が合わない」などである。

こうした回答から、新興住宅地域である北区では、施設不足への不満が代表するように地理的条件が生涯学習機会参加へのネックとなっており、一方で、商業地域である兵庫区では家業





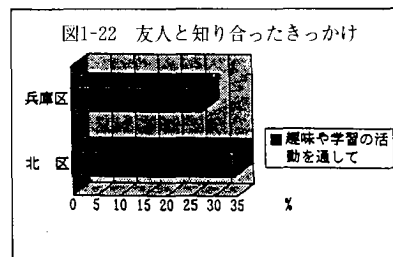
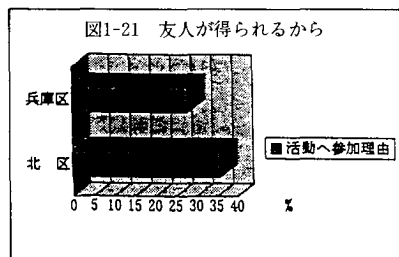
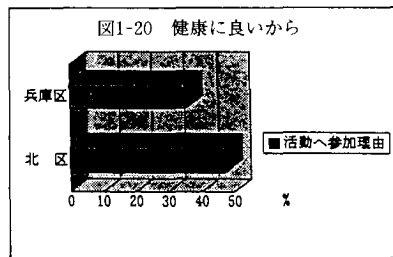
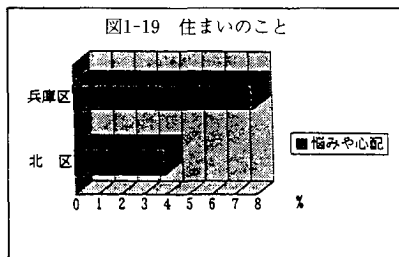
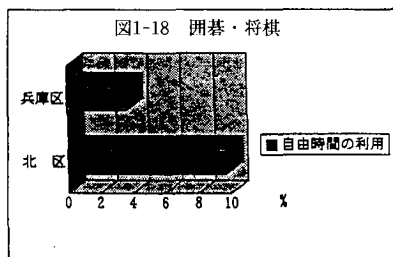
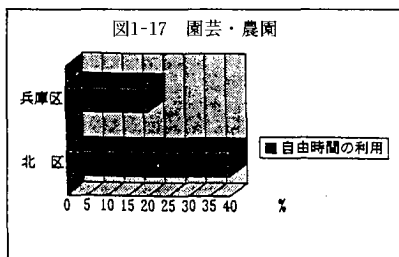


表1 地域変数と属性、それに準ずる変数との相関係数

性別	0.0155	夫婦健在	0.0043
年齢	-0.0106	所得	-0.0591
学歴	0.0375	居住年数	0.1653**
職業	0.0904**	希望居住地	0.0357
休日の		現在の就労	-0.0711*
過ごし方	-0.0152	今後の計画	0.0552
住居形態	0.0312	健康状態	-0.0258
世帯人数	-0.2040**		

との関連からか、学習時間の無さや時間帯が合わないなどといった、時間的条件の不整合が生涯学習機会への参加を阻害する要因になり得ていることを指摘できるのである。

次に、「あなたはこれまでにどのような社会教育施設を利用したことがありますか」という設問によって、無作為に並べた22施設の中から、地域によって有意な差が表われた項目を見た場合、利用経験のある社会教育施設によってもいくつかの地域の特徴を見いだすことができた。図1-8から図1-13までの計6つの施設がそれをまとめたものである。兵庫区に高い数値を示す施設は図1-8の「婦人会館」と図1-12の「勤労会館」であり、その他の地域中心型の施設は軒並み北区に高い数値となっている。社会教育施設にはいくつかの分類方法があるが、この調査から見る限りでは、機能別に分類した場合、商業地域である兵庫区においては、広域的ではあっても、その施設の利用対象者をある程度限定した施設の利用率が高いようである。逆に、住宅地域である北区においては、地域制限的ではあっても利用対象者を限定せず、多目的利用が可能な施設についての利用率が高い結果となっているという特徴を指摘できる。

さて、自由時間の使い方による地域差については、直接的には生涯学習との関わりを論ずることができない項目もあるが、ここではこれまで通り、地域による有意差のあるものをすべて図示した。図1-14から図1-18までの計5図がそれである。特徴的な項目としては、図1-14に見られるように、商業地域であるがゆえに兵庫区の方が「友人とのおしゃべり」や図1-16の「繁華街やデパートのぶらつき」が北区に比べて多く、逆に図1-17のような「園芸・農業」は北区に高い数値となるなど、ここでも地理的特徴がそのまま地域差となっている傾向を見てとることができた。こうした自由時間の使い方の差異は、広義にはコミュニティーネットワーク形成のプロセスになり得るものであり、商業地域におけるネットワークは、住宅地域のそれに比べた場合、無意図的・無目的的なプロセスによる部分がやや大きいのではないかということが指摘できそうである。

地域差を検討する際に、有意差を持つ最後の変数群としては、図1-20から図1-22にひとつの示唆を得ることができた。まず図1-20と図1-21は地域やグループ活動への参加理由を尋ねたものであり、図1-15とあわせて住宅地域である北区に、「健康のために」という明確な目的や参加理由を持って、スポーツに取り組んでいる人々が多い傾向を見ることができた。また、図1-21、同じく1-22からは北区の方に、「友人を得るために」地域やグループ活動に参加する（36%）、あるいは、友人と知り合ったきっかけを「趣味や学習の活動を通して（34.5%）」という有意な回答を得た。これも先のネットワーク形成の観点から見た場合、住宅地域における生涯学習機会への参加は、とりわけ交友関係を結ぶ上において意図的・目的的な機能を持ち合わせていることを明らかにすることができた。

こうして見てきた場合、分析視点のひとつめにとらえた地域差は、生涯学習に対する考え方や取り組みに、有効な変数となり得るように思われるのである。しかし、ここで考慮に入れて

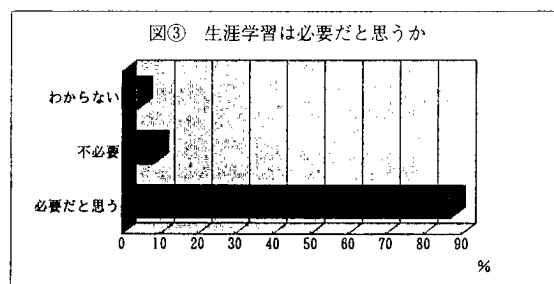
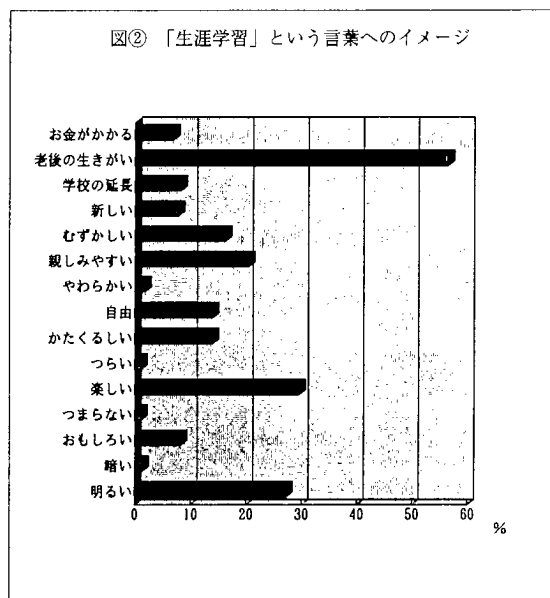
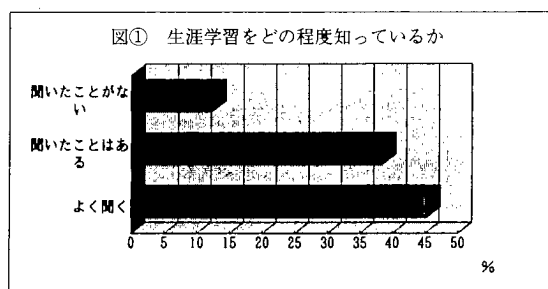
おかねばならないことは、両地域の母集団を比較した場合に、単純な地理的要因以外にもっと本質的な差があるかどうかであり、こうした地域変数と属性、あるいはそれに準ずる変数との間の相関係数を取り、地域差を説明するのに有効な効果を持つ変数を見いだす工夫をしたものが表1である。結果的に地域変数との間に相関関係が見られたのは4変数であり、それぞれ変数の右肩に「*」を付した。ひとつのものは1%水準で、ふたつのものは0.1%水準でそれぞれ有意であることを示す。「職業」は北区にやや専門的・管理的職種に就いていた割合が高い傾向が見られたが、その他の変数では兵庫区の方が、「世帯人数」も多く、現在の家での「居住年数」も長く、「現在も働いている」割合が高いという違いがあることを見てとることができたのであった。兵庫区におけるこうした変数の特徴は、まさに商業地域のそれであり、つまりはこれまで考察してきた地理的要因以外のところに生涯学習機会への参加をめぐる特質を見ることができなかったという結果となった。

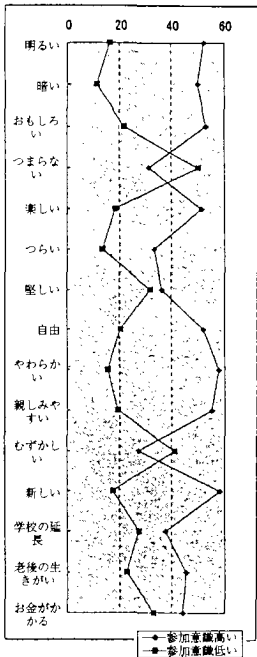
こうして見た場合、今回の調査では、両地域に居住する人々の属性やそれに準ずる変数に、特徴的な差がなかったことと、もうひとつは人生観や価値観といった心理変数においても、両地域ともほとんど同様の回答パターンを得たという特質を申し添えておかねばならない。これは、兵庫区も北区もそれぞれ地域の機能に差こそあれ、神戸市という同じ都市部の地域であるということが大きな理由であろうし、高齢者に限った今回の調査の性格上の特質であるということもできる。したがって、後から述べる結論部分をやや先取りするならば、都市部における住宅地域と商業地域といった地域変数は、全体から見た場合、生涯学習機会への参加・非参加を分岐するそれほど大きな規定要因とはならず、むしろ地域変数は、いわば「あと付けの」、地域の機能に対する被説明変数であると考えた方が、より説明力が増すようである。

3 生涯学習への認識や参加意欲による検討

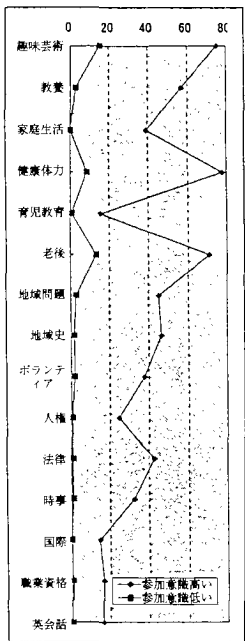
それでは2つ目の分析視点である、生涯学習への認識や参加意欲の違いによって、回答パターンにどのような差異が表れるのかについて検討していきたい。

まず分析の前提として、生涯学習に対する認識やイメージ、必要性について尋ねてみた。「あなたは生涯学習という言葉をご存じですか」という設問に対する回答として、「よく聞く (45.2%)」「聞いたことはある (38.4%)」「聞いたことがない (12.3%)」という結果を得た(図①参照)。また、「生涯学習という言葉からどのようなイメージを持たれますか」を尋ねたところ、「老後の生きがい」という肯定的で目的性を持ったイメージとしての回答が56.4%と最も高く、次いで「楽しい (29.5%)」や「明るい (27.2%)」、「親しみやすい (20.4%)」などといった回答が上位を占めている。逆に、否定的なイメージは「むずかしい」の16.2%が最も高い数値となっており、「堅苦しい」の13.9%などとともに、「学校」や「教育」、「学習」などといった一連の言葉に対するイメージがそのままこうした評価につながって

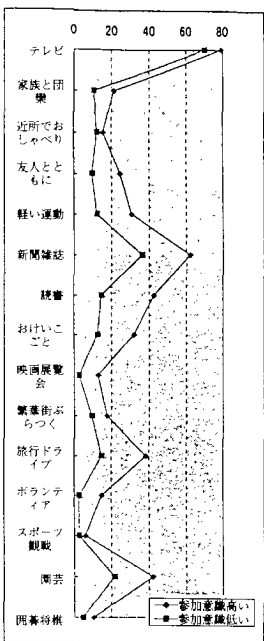




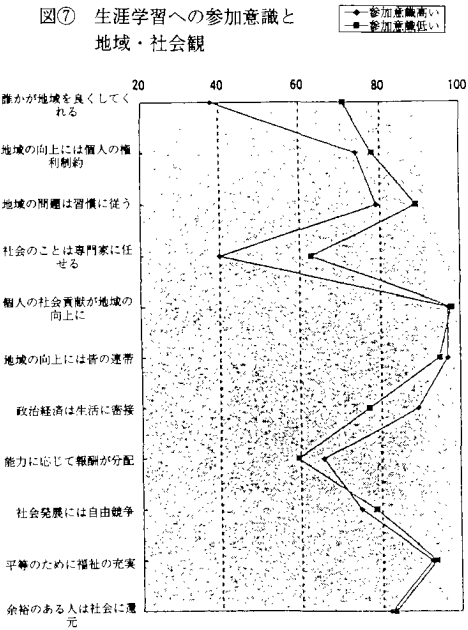
図④ 生涯学習への参加意識と生涯学習イメージ



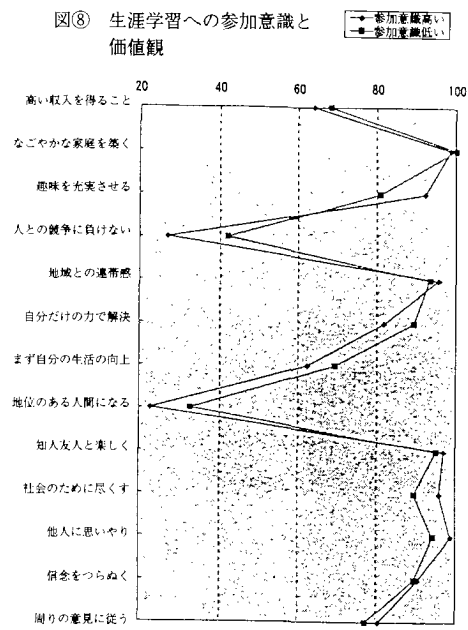
図⑤ 生涯学習への参加意識と学習内容



図⑥ 生涯学習への参加意識と自由時間の過ごし方



図⑦ 生涯学習への参加意識と地域・社会観



図⑧ 生涯学習への参加意識と価値観

いるといえるかもしれない（図②参照）。

また、「生涯学習は必要だと思いますか」という必要性を尋ねたところ、「必要だと思う」という回答が87.2%であり、「不必要（8.4%）」、「わからない（4.3%）」という回答となり、その必要性が広く認識されてきていることを示す結果を得たのである（図③参照）。

さて、本調査の中心的な眼目は、生涯学習に対する参加・非参加を分岐する規定要因を探ることにあり、本来ならばこうした認識やイメージ、必要性に対するそれぞれの回答をそのままクロス集計に持ち込むのが一般的なところである。しかし、前述のように、こうした学習関心といった種類の調査を行う場合、ピーターゼン等の主張にあるように、例えば人々の学習要求にもさまざまなレベルや種類があり、いわゆる「アンフェルト・ニーズ」というような心理機構のブラックボックスまで探求することは質問紙調査では限界があるのかもしれない。したがって、生涯学習への認識、参加意欲の測定も同様であり、ここではそのデータの客観性と精度を高め、学習機会への参加意欲をより精緻に導き出す工夫として合成変数を作成した。変数の作成プロセスについては表2の通りである。変数の作成において投入されたのは、全部で5項目12カテゴリーであり、こうして作成した合成変数を、ここでは「生涯学習参加意識」と名付け、全サンプルを参加意識の高いものから順に「参加意識高位群」「参加意識中位群」「参加意識低位群」とに3分割して新たなカテゴリーを作成した。変数作成後の参加意識の内訳は、表2下部の通りである。得点をソートした場合、分類するのに必ずしもきっちりと3分の1ずつとはいかず、やや高位群に偏る部分はあるが、全体のバランスから分析に支障のない範囲であると思われる。

さて、こうして作成した「生涯学習参加意識」変数と調査に投入された主要なグループ変数との関係を明らかにするため、予備的に作成したものが前掲の図④から図⑧までである。このグラフの中では、参加意識の高い群と低い群のみによる比較を行った。図④からは、生涯学習に対するイメージが「自由」や「やわらかい」「親しみやすい」「新しい」といった肯定的な部分で大きな差となって表れていることがわかる。同様の見方をしていくと、図⑤の学習内容では「趣味芸術」や「教養」「健康体力」「老後」といった内容へのコミットメントの差が生涯学習への参加意識を分岐するものとなっているようである。また、参加意識が低い群はどのような学習内容にも余り大きな関心を示していないものの、強いていえば「趣味芸術」「健康体力」「老後」といった学習内容ならば、やや興味を持つ傾向にあることが指摘できる。

図⑥の自由時間の過ごし方については特徴的な点はあまりないものの、両者の差が最も大きいのが「新聞雑誌」や「読書」といった活字メディアに対する項目と、「旅行ドライブ」といったように、単なる外出というだけでなく行動半径の広さへの積極性を求めた項目にその差が表れるようである。

図⑦と図⑧は地域観や社会観、価値観といった心理的な変数と参加意識との関連をみたもの

図2-1 教養に関する学習への興味

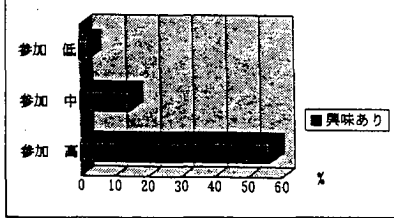


図2-2 健康や体力作りへの興味

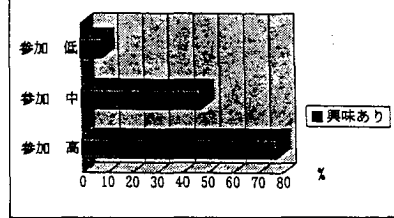


図2-3 講演などで学ぶことへの関心

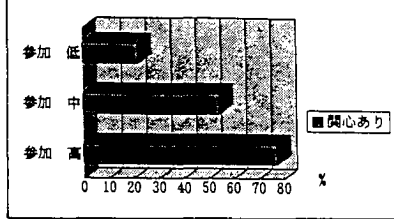


図2-4 継続学習への興味

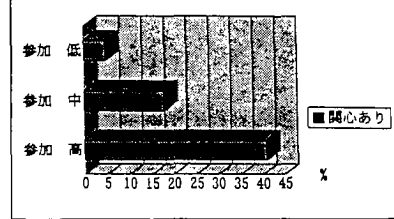


図2-5 公共施設利用の機会・関心

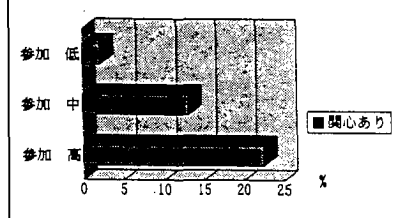


図2-6 カルチャーセンター利用の機会・関心

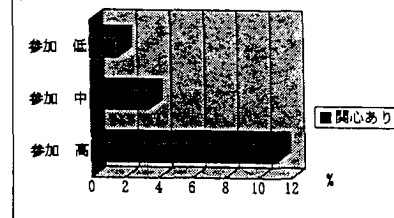


図2-7 学習情報の入手に困っている

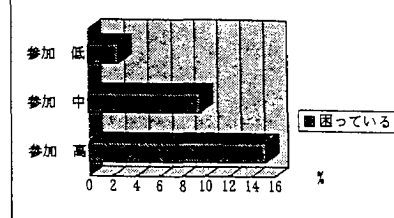
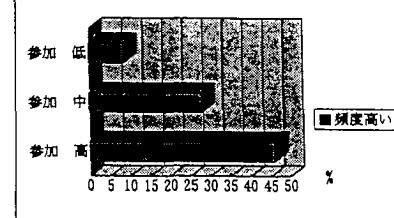


図2-8 行政機関の広報の利用頻度



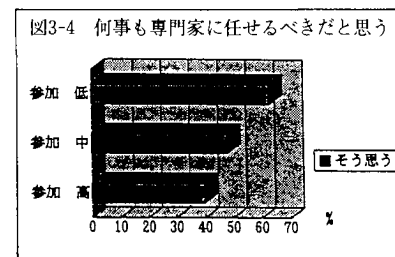
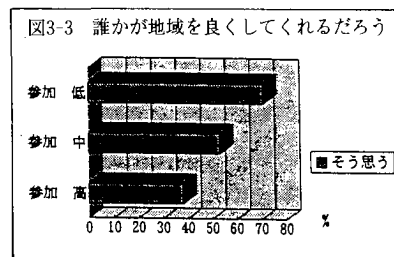
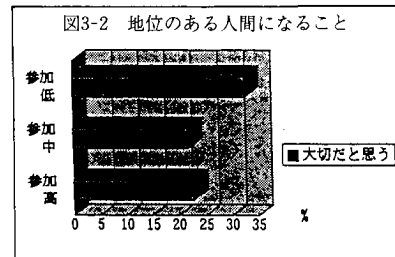
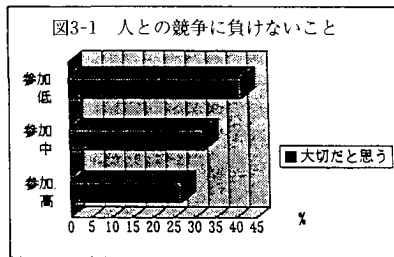
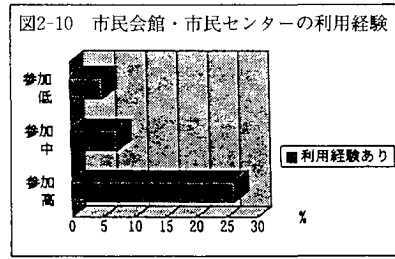
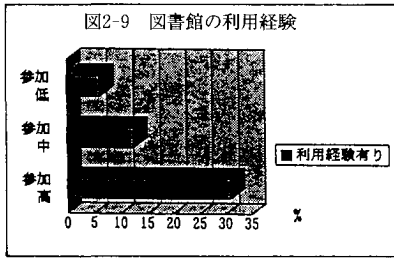


図3-5 家族のことが心配である

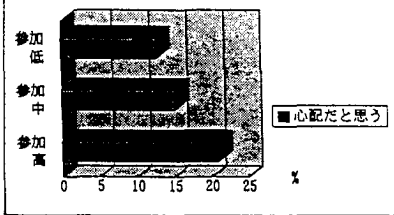


図3-6 生き生きとした老後を送るために、学習機会は重要である

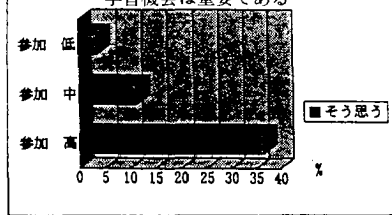


図3-7 相談相手として家族の役に立っている

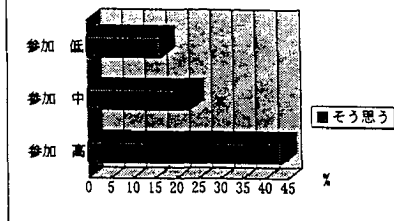


図3-8 グループ活動への参加は自分の向上につながる

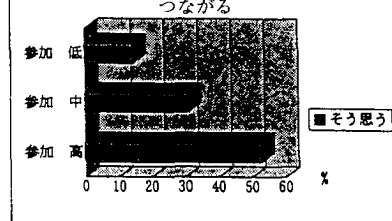


図3-9 老人の役割はどうあるべきか

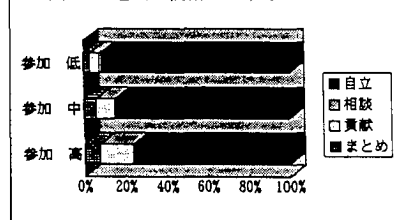


図3-9 老人の役割はどうあるべきか

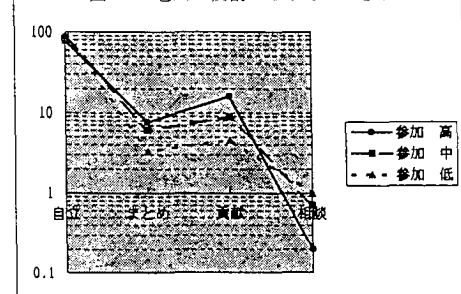
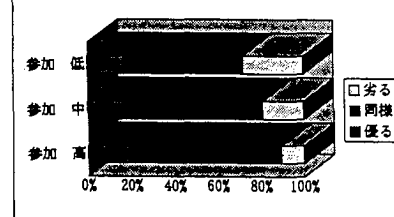


図3-10 若者との優劣の意識



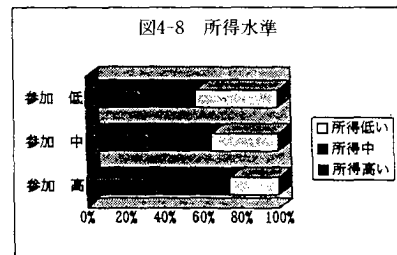
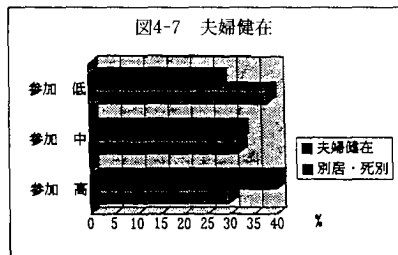
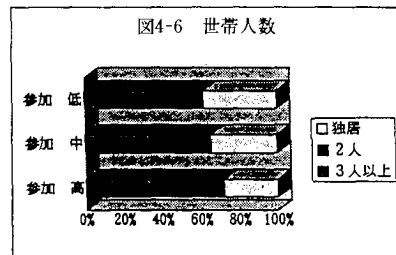
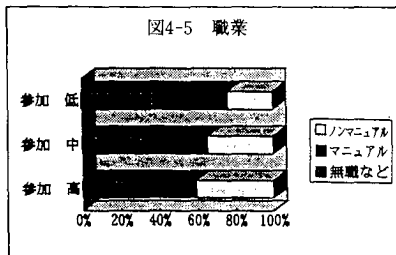
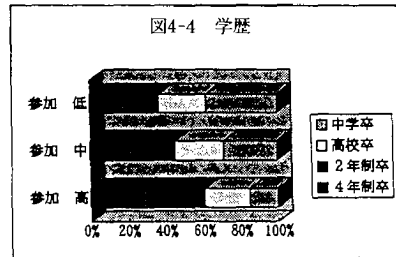
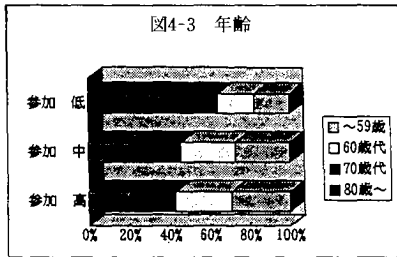
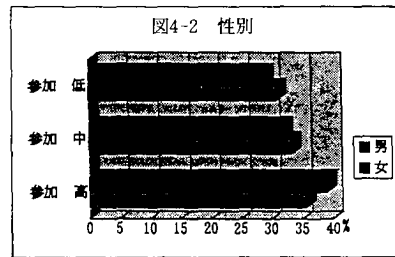
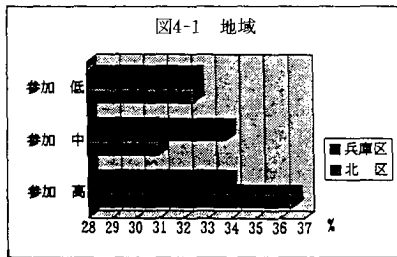
である。グラフの折れ線がほとんど同じ形状と数値をとっているが、図⑦からは、「(自分がしなくても) 誰かが地域を良くしてくれるだろう」や「社会のことは専門家に任せる」といった項目においてその差が最も大きく、他律的な意識の強さが生涯学習への参加を阻害する要因となっていると言えそうである。また、図⑧からは、「人との競争に負けない」や「地位のある人間になる」といった項目においてその差が大きく、生涯学習へ参加する意識の低い人ほどこのような競争意識を重要視するというユニークな結果を得た。こうした結果から、生涯学習へのコミットメントは、大きく分けて「参加形態」「意識」「属性」の3点によって規定されるのではないかという仮定を得ることができたのである。

そこで、これらの傾向をふまえながら、生涯学習機会への参加意識と全変数との関連を探り、参加・非参加を分岐する要因を検討するために、まず相互の相関係数をとり、0.1%水準で有意な差が認められるものをピックアップし、それを図表にしたものが図2-1から図4-8までである。まず表の種類と見方についてふれておきたい。図表中に「参加 低」とあるのが、先ほど合成変数によって作成された生涯学習機会への参加意識が低い群であり、同様に「参加中」は、参加意識が中位にある群、「参加 高」は学習機会へのコミットメントが強い群である。また、先の仮定に合わせて、図2-1から図2-10までは、質問紙の中において、生涯学習への「参加形態」を中心に尋ねた項目の中から相関係数の高かったものを、図3-1から図3-10までは同様に人生観や価値観といった「意識」を尋ねた項目の中から相関係数が高かったものを、最後に図4-1から図4-8までは「属性」との関係で見たものを図表にまとめた。

まず図2-1から図2-6までは、どのような学習内容や学習形態に興味・関心があるのかを、参加意識との相関が高いものだけに限定してまとめたものである。ここからは、学習内容として「教養」や「健康や体力づくり」への興味に参加意識によってかなりきれいに分類され、学習方法では「講演」や「継続学習」が、また利用関心からは「公共施設」や「カルチャーセンター」への関心が、生涯学習への参加・非参加を分岐する要因となっていることが指摘できるのである。今回の調査前提でも、いわゆる「教養型」の学習利用層は、かなり生涯学習への関心が強い群ではないかといった仮説を持っていたが、その仮説が支持されただけでなく、「健康や体力づくり」といった、いわゆる間口が広く、誰でもコミットできそうな学習内容においても参加意識の高低がかなり強く効くことが明らかとなった。

また図2-7からは、参加意識の高い層ほど「学習情報の入手に困っている」と回答する比率が高くなっており、図2-8の「行政機関の広報の利用頻度」が高いことと合わせて、公的な学習情報への関心とその情報入手ルートの手がかりがつかめるとともに、行政機関の広報は学習意識の高い層にとっては貴重な生涯学習情報メディアであることが指摘できる。

また図2-9と図2-10からは社会教育施設のなかでも「図書館」と「市民会館・市民センター」の利用経験の有無が参加意識と強い関連性を持つことも指摘できた。とりわけ図書館は、前述した自由時間の過ごし方において、活字を利用する層との関連が容易に察せられる。



次に「意識」の部分からアプローチしたい。図3-1から図3-4によれば、先ほど論及した通り、競争心や虚栄心、あるいは他律的な価値観を強く持つほど生涯学習への参加を阻害する要因になるという特徴的な結果を得た。これには幾通りかの解釈が可能であるが、図3-8にもあるように、学習が自己の向上につながり、ひいては自己をとりまく環境をも統制する自律的な行為であることはいうまでもなく、また学習という言葉の含意が、学校教育の経験を通して競争的なものとして培われた場合、それに対する拒否反応が根深く、生きがいの創造というよりは、「再び机を並べて学習でもない」といった否定的な感情への動因となり得ているのではないかとと思われる。これは後述するが、「学歴」が高いほど参加意識が強いという規定力を持つことと無関係ではないと思われる。

また図3-7、図3-9、図3-10などからは、「相談相手として家族の役に立っていると思う」や、「若者との優劣の意識」としては「優れている」とはいわないまでも、「同様」か少なくとも「劣っていない」といった強い自己価値や存在意義を持っている人ほど学習意識が高いという結果を得た。またそうした価値意識や存在意義と同様に「老人の役割はどうあるべきか」を尋ねた場合、「自立すべき」であるとか「相談役として」といった項目よりも、もう一步進んで「まとめ役として」や、より積極的には「社会へ貢献する」といった回答に学習への参加意識の高い層が多い傾向を見てとることができ、内面的な意識のうえでの積極性との関連を指摘できるのである。

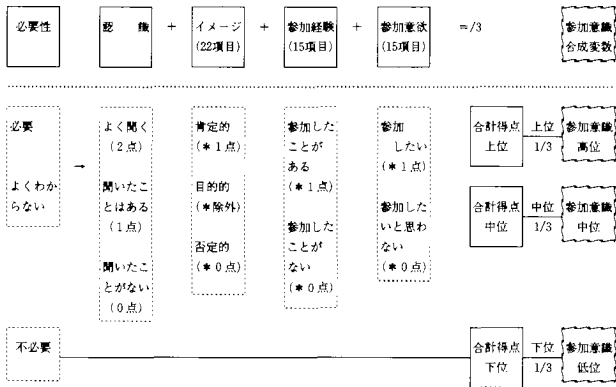
図4-1から図4-8は、「属性」あるいはそれに準ずる変数との関連を見たものである。一見しただけで明らかに参加意識との関連を指摘できそうな変数としては、図4-3における「年齢」の上昇に伴う参加意識の低下、図4-4の「学歴」において、高学歴になるほど参加意識が高くなるといった特質、同じく図4-5の「職業」において、便宜的にマニュアルとノンマニュアルとに大別した場合、専門的・管理的なノンマニュアルほど学習参加が高くなる傾向、図4-8において「所得水準」が上昇するほど参加意識が高くなる特徴などがあげられる。ここで指摘した属性変数は、その多くが学校教育における学習意欲との連関をとらえたこれまでの先行研究においても、一般的にその傾向が明らかにされたものであり、ここで生涯学習への参加意識とも同様な傾向を見せ、有意な変数となることが確認できた。

4 生涯学習機会への参加・非参加を分岐する規定要因の検討

それでは、分析視点の3つ目として、生涯学習機会への参加・非参加を分岐する規定要因とその規定力の強さの検討、変数相互の関連性の分析をしてみとめにかえたい。表3、表4及び表5がその分析結果である。分析に際しては、多変量解析において独立変数が質的データである場合の、いわゆる判別分析として数量化Ⅱ類を用いた。

まず表3の属性との分析については、8つのアイテムを独立変数とし、生涯学習への参加・

表2 生涯学習への参加意識の合成変数作成プロセス



合成変数「生涯学習参加意識」作成後

VALUE	FREQ	PERC	VALID P	CUM P
参加意識				
低位群	463	32.5	32.5	32.5
中位群	457	32.0	32.0	64.5
上位群	506	35.5	35.5	100.0
.....
TOTAL	1426	100.0	100.0	

表3 生涯学習への参加・非参加を分岐する規定要因
<数量化Ⅱ類 分析結果>

√F=0.284

変数名	カテゴリー	ウエイト	偏相関	順位
地域差	北 区(住宅地域) 兵庫区(商業地域)	0.162 -0.253	0.070	6
性別	男 性 女 性	-0.060 0.046	0.021	8
年齢	一60歳 60歳代 70歳代 80歳一	0.505 0.301 -0.251 -0.093	0.107	4
学 歴	中学卒 高校卒 2年制卒 4年制卒	-0.715 0.039 0.397 0.361	0.201	1
職 業	ノンマニュアル マニュアル 無職(主婦含む)	0.352 -0.357 0.071	0.161	2
世帯人数	1人暮らし 2人暮らし 3人以上	-0.051 0.263 -0.193	0.071	5
夫婦状況	死別・別居等 双方とも健在	-0.150 0.071	0.040	7
所得水準	所得低い 所得中位 所得高い	-0.544 0.180 0.202	0.111	3

表4 生涯学習への参加・非参加を分岐する規定要因

<数量化Ⅱ類 分析結果>

意識

√F=0.502

変数名	カテゴリー	ウエイト	偏相関	順位
人との競争に負けないこと	大切 大切でない	-0.331 0.120	0.063	9
地位のある人間になること	大切 大切でない	-0.127 0.032	0.021	10
誰かが地域を良くしてくれる	そう思う そう思わない	-0.605 0.527	0.247	3
何事も専門家に任せるべき	そう思う そう思わない	-0.312 0.221	0.086	7
家族のことが心配である	は い いいえ	0.424 -0.101	0.078	8
老後に学習機会は重要である	は い いいえ	0.763 -0.846	0.392	1
相談相手として役立っている	は い いいえ	0.483 -0.264	0.212	4
地域活動は自分の向上に繋がる	は い いいえ	0.515 -0.154	0.271	2
老人の役割はどうあるべきか	自立すべき まとめ役 社会に貢献 相談相手	-0.251 0.280 0.720 -0.301	0.181	5
若者との優劣	優っている 同じ 劣っている	0.211 0.383 -0.412	0.120	6

表5 生涯学習への参加・非参加を分岐する規定要因

<数量化Ⅱ類 分析結果>

√F=0.654

変数名	カテゴリー	ウエイト	偏相関	順位
教養に関する学習への興味	あ る な い	0.790 -0.610	0.613	1
健康や体力作りへの興味	あ る な い	0.667 -0.486	0.553	2
講演などで学ぶことへの関心	あ る な い	0.397 -0.427	0.441	3
継続して学習することへの関心	あ る な い	0.222 -0.622	0.421	4
公共施設利用の機会や関心	あ る な い	0.164 -0.240	0.230	9
カルチャーセンター利用の機会や関心	あ る な い	0.268 -0.160	0.236	8
生涯学習情報の入手に困っている	は い いいえ	0.158 -0.166	0.187	10
行政機関の広報利用度	高 い 低 い	0.168 -0.661	0.389	5
公共図書館の利用経験	あ る な い	0.188 -0.391	0.318	6
市民会館や市民センターの利用経験	あ る な い	0.220 -0.349	0.310	7

非参加を代替する従属変数には参加意識の合成変数を用いた。表4や表5においても同様だが、モデルの精度をあげるために、従属変数との関係が強い変数を選んで独立変数に加えるといった工夫を繰り返した結果を表にしたものである。

属性との関連で見ると、生涯学習機会への参加・非参加を分岐する規定要因としてはやはり前述のような「学歴」や「職業」、「所得水準」などとの関係が他の属性変数と比して非常に強いという結果を得た。こうしたアイテムは広義には階層差を示すものであり、生涯学習機会が、高齢者層においてもいわゆる学校教育や社会階層の序列でいうところの上位に位置する人々を中心に展開されているといった特徴を持つことが明らかとなった。こうした階層的差異は、学習へ参加する層にとっては他意のないこととして強く認識され得ないカテゴリーであるが、そうした学習機会に参加しない、あるいは参加したくない層にとっては、いつまでたっても参加意識を阻害し続けられる要因となり、参加・非参加の差がますます大きく、また明確に区分されていくのではないかと懸念すら感じざるを得ない結果であった。

またひとつめの分析視点でみた「地域差」は、他の変数との比較で見た場合、やはり参加・非参加を分岐する大きな要因とはなり得なかったことも合わせて指摘できた。これも先に考察した通り、都市部における地域差は、都心部までの地理的な条件や都市部において付与された機能的な差にこそなれ、学習意識を阻害したり促進したりする要素にはなり得ないということができる。

表4において意識との関係を見た場合、生涯学習への参加・非参加を最も強く規定する意識は、「老後を生き生きと過ごすのに、学習機会が重要である」と回答するか否かであった。この結果は生涯学習参加と学習機会とのトートロジーであり、確かに至極あたりまえの結果であるが、質問紙の中で同じ設問に用意された他のカテゴリーが全部で13あり、その中には「お金が重要である(55.2%)」や「健康(89.3%)」、「友人(58.1%)」、「家族(57.0%)」などが並び、こうした項目を多くの人が重要であると回答している中で、強いて「学習機会が重要である(17.8%)」という回答が得られたことは、生涯学習へ付与されたかなり強い価値意識の表れと理解することができる。

また、続いて規定力が強い項目が、「地域活動は自分の向上につながる」や「誰かが地域を良くしてくれるだろう」といったアイテムに見られるように、「地域」をキーワードにしたものであり、こうした「地域」への寄与や関心の高さが意識の上で生涯学習機会への参加を促進する誘因たり得るのではないかと解釈できる。

最後に表5の形態との関連である。ここではまず学習内容に関する興味や関心の強さが、参加・非参加を分岐する最も強い規定要因となっていることが明らかである。すなわち「教養」や「健康・体力づくり」といった内容の学習に関して、「興味がある」と回答するか否かが形の上では学習参加へのいわゆる「踏み絵」となっているようである。そこで「教養」に対する学習関心があるという回答と、「健康・体力づくり」への関心を示した回答の間の単純相関係

数をとってみると、0.7368とかなり高い相関を示し、教養探求型の学習ニーズを持つ人は健康や体力づくりにも高い学習関心を持っていることが指摘された。ここでも「教養」と「健康」は別のものではなく、一連のものであるという、高齢者に特徴的な学習ニーズの一端を指摘することができる。また、こうした学習内容に続いて、「講演などで学ぶことへの関心」や「継続して学習することへの関心」といった学習形態や学習方法に関する項目の規定力がかなり強いことも明らかとなった。

各カテゴリーごとに作表したそれぞれの表の、独立変数全体で、生涯学習機会への参加・非参加をどのくらい説明できたかを表すのが各表の右上の相関比エータ値の大きさである。この程度の相関比を持てば、一般的にモデルとしての独立変数の選択が正しかったか否かを検討しなければならないほど小さな値ではないといえることができる。

5 まとめにかえて

以上、3つの分析視点にしたがって、生涯学習機会への参加・非参加を分岐する規定要因の分析を進めてきたが、こうした生涯学習機会へのコミットメント、あるいは広義での学習関心や学習要求を調査分析によってとらえる際に重要なことは、そうした変数を何に求め、どのような意味を持たせて使用するかを検討することである。本論中にもふれたが、例えばピーターゼン等の指摘を借りるならば、今回投入した「参加意識」変数が、構造的ないしは多面的なものとして理解されなければならないのであり、そうした視点からの幾ばくかの工夫が変数の合成であった。しかしながらこうして作成した変数も、例えば自発的な学習要求に基づく参加意欲はあるものの、諸処の理由によって参加経験に結びつかないといったケースにおける意欲と参加のギャップをどのようにとらえるかといった問題も内包しているのである。こうした反省も含めた上で、今後のより精緻な調査分析を継続していかなければならない。

我が国における高齢化は急速に進展し、世界でも有数の長寿国として「人生80年時代」を迎えるに至っている。この高齢化現象は、今日の経済社会の仕組みや生活、文化などさまざまな領域に大きな影響を及ぼしつつあり、新たな社会への変革が求められていることも事実である。そうした中で、すべての人々が心身ともに健康で、明るく、生きがいに満ちた生活を送れるような社会の実現が望まれ、とりわけ、高齢者にとってそれは緊急の課題でもある。

本調査研究は、さらなる高齢化の進展を考えると、高齢者の生涯学習機会や地域社会活動への参加がどのような現状であり、かつそれらを阻害する要因としての問題点の所在がどこにあるかを探るための基礎的な資料を提供することを目的としていることを附記し、まとめたい。

注

- (1) NHK 学習関心調査とは、放送文化調査研究所によって学習ニーズを把握するために、1982年以降3年ごとに実施されているものであり、学習関心を行動レベルと意識レベルに分けて分析するところに特色を持つものである。
- (2) 「学習関心の氷山モデル」についてや、行動化の可能性の大小により、学習関心を二つのレベルに分けたものの解釈としては、藤岡英雄の解説（日本生涯教育学会編、『生涯学習辞典』、1990）に詳しい。
- (3) データの収集にあたっては、文部省の科学研究費補助金（一般研究(c)，課題番号06610260，研究代表者；宮崎和夫神戸親和女子大学教授，平成6年度より3年間）を受けて実施したものであり，調査サンプルの属性については以下の通りである。

調査サンプルの属性

地 域	北 区（住宅地域）	884	(62.0%)
	兵 庫 区（商業地域）	542	(38.0%)
性 別	男 性	531	(37.2%)
	女 性	786	(55.1%)
	NA/DK	109	(7.6%)
年 齢	60歳未満	63	(4.4%)
	60歳代	407	(28.5%)
	70歳代	680	(47.7%)
	80歳以上	144	(10.1%)
	NA/DK	132	(9.3%)

<調査時期>

平成6年9月～10月

<調査場所>

神戸市北区・兵庫区

<調査対象>

北区・兵庫区に居住する高齢者（主として60歳以上）

<調査方法>

自記式質問紙による配票・郵送法

（はら きよはる 社会教育学科）

（1995年10月25日受理）